



タイトル 日本人の知らない「クレムリン・メソッド」
世界を動かす 11 の原理

著 者 北野幸伯（きたの よしのり）

出 版 社 集英社インターナショナル

発 売 日 2014年12月20日

ページ数 350 ページ

表紙の一番上にロシア語でクレムリン・メソッドと書かれているが、著者は、ロシアの外交官とFSB(情報員、すなわち元KGB)を養成するロシア外務省附属モスクワ国際関係大学(モスクワ大学と並ぶ超エリート大学)を日本人として初めて卒業。現在、モスクワ在住の「国際関係アナリスト」である。著書に「日本自立のためのプーチン最強講義」、「隷属国家日本の岐路」、「ボロボロになった覇権国家」等がある。

アメリカ、中国、ロシア等々、それぞれが自国の戦略に沿ったプロパガンダで国際社会を騙している。

中国は口先では「平和的台頭」などと言っているが、「国益のために、国家はあらゆるウソをつく」というのが、国際社会の原理であり、それを見破るためには、「真実は、言葉ではなく行動に現れる」というのが著者の考え方である。

中国の「平和的台頭」に呼応するように、日本国内でも「沖縄に米軍基地はいらない」、「平和憲法を守っていれば戦争は起きない」などと言う人がいまだにいる。

そういうウソに騙され続けたら、我々の子孫はチベットやモンゴル、ウイグルのような目に逢うかもしれない。それを避けるためには、こういうウソを見破るだけの見識を本書を読んで日本人に持って欲しいと著者はいう。

さっそく、目次を見てみよう。

まえがき

第1章 世界はある「原理」で動いている

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第1の原理

世界の大局を知るには、「主役」、「ライバル」、「準主役」の動きを見よ

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第2の原理

世界の歴史は「覇権争奪」の繰り返しである

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第3の原理

国家にはライフサイクルがある

第2章 世界は自国の国益で動いている

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第4の原理

国益とは「金儲け」と「安全の確保」である

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第5の原理

「エネルギー」は「平和」より重要である

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第6の原理

「基軸通貨」を握るものが世界を制す

第3章 なぜ、世界の動きが見えないのか？

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第7の原理

「国益」のために、国家はあらゆる「ウソ」をつく

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第8の原理

世界の全ての情報は「操作」されている

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第9の原理

世界の「出来事」は、国の戦略によって「仕組まれる」

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第10の原理

戦争とは、「情報戦」、「経済戦」、「実戦」の三つである

日本人の知らないクレムリン・メソッド 第11の原理

「イデオロギー」は、国家が大衆を支配する「道具」にすぎない

あとがき

著者は、国にも自然の「春夏秋冬」、人生の「青春・朱夏・白秋・玄冬」のようなプロセスがあるという。すなわち、前の体制からの移行期（いわゆる混乱期）・成長期・成熟期・衰退期の四つである。

ある国が混乱していたとする。そこに強力な指導者が出てきて、まず「政治」を安定させ、移行期を終結させる。次に、指導者は「経済」を成長軌道に乗せ、そして高度成長が始まる。やがて高度成長の時期が終わり、低成長安定の成熟期に入るというものである。

その国がもしいま「成長期」であれば、次は必ず「成熟期」が来る。「成熟期」であれば、やがて「衰退期」に向かう。現在の位置さえ判れば、その国が今後上向きになるのか、

下向きになるのかが、瞬時に判るといふ。

近年の中国は、経済が成長したことで賃金水準が上昇し、企業が中国から人件費の安い国へと脱出している。これにより、中国経済の空洞化が生じ、失業者が急増し、経済成長を盾に正当性を示してきた中国共産党の足元が揺らぐことになり、人民の不満が爆発する可能性が出てきた。

中国が、アメリカや日本からの脅威を煽ることで人民の不満を逸らそうとしていることから、革命が起きるかも知れないという兆候を読み取ることが出来る。

このように、国家のライフサイクルから、その国の近い将来どのような動きを見せるかを予測できるというわけである。

EUは、イギリス、スペイン、オランダ、フランス、ドイツなど、かつて覇権国家として絶頂期を経験済みの成熟国の集まりなので、EUが新国家として再び成長期に突入することはあり得ないという。

さらに、アメリカ、ロシア、中国、インド等のライフサイクルを見ていくと、それらの国が辿る道が把握でき、さらに重要なことは、今後、我が国が関係を緊密にしていくべき国が見えてくるというわけである。

人間にはなぜ格差が生じるのか。著者は、「情報に対するポジション」に大きな原因があるという。そのポジションは、

- (1) 情報を流す人。洗脳する人。支配者
- (2) 情報を正確に理解できる人
- (3) 洗脳されればなしの人。一般大衆

の3つである。日本人の大部分は(3)の段階だそうである。

本書は、世界中の支配者の意図を正確に読み取り、正しい情報を見極め、情報を理解できる人になるためのマニュアルだと、著者は強調する。

世界には、様々な「情報ピラミッド」があり、常に「作為的な情報」が流されている。情報ピラミッドの代表的なものを挙げると

「米英」情報ピラミッド：英・米に都合のよい情報が流される。

「欧州」情報ピラミッド：欧州に都合のよい情報が流される。

「中共」情報ピラミッド：中国に都合の良い情報が流される。

「クレムリン」情報ピラミッド：クレムリンに都合の良い情報が流される。

「イスラム」情報ピラミッド：イスラム教に都合の良い情報が流される。

などなど。

残念ながら、「日本」情報ピラミッドは存在しない。敗戦によって破壊された時に「米英」情報ピラミッドに組み込まれた日本は、いまでも「米英」情報ピラミッドに属している。

もし、「客観報道」が存在しているのなら、どの情報ピラミッドでも似通った報道内容に

なるはずだが、情報ピラミッドが違えば、その国の政府が国民、あるいは世界に対してプロパガンダを行うので、報道内容も全く異なるわけである。

プロパガンダとは、「特定の思想、世論、意識、行動に誘導する意図を持った宣伝行為」のことで、国家が主体的にこれを行っているわけである。

中国やロシアのマスコミは、年中「プロパガンダ・マシーン」だが、英米・欧州もプロパガンダが無いわけではない。たとえば、イラク戦争の時、「イラクに大量破壊兵器がある」、「フセインはアルカイダを支援している」と言う話は、すべてウソだったが、マスコミはそのことを指摘せず、ブッシュ政権のウソをそのまま垂れ流していた。政府が戦争準備段階に入った時、あるいは実際に戦争になれば、アメリカのマスコミは政府への迎合を強め、単なる「プロパガンダ・マシーン」に変貌する。

現在ウクライナ問題で激しく対立している、アメリカとロシアの報道内容の違いは何処から来るのか。日本にいと、ロシアで何が報道されているかなかなか判らない。モスクワ在住の著者は、幸い日本、アメリカ、欧州のメディアに加え、ロシアメディアに接することが出来る。ロシアメディアだけでは、「クレムリン」に洗脳されてしまうが、日米欧メディアと見比べることで、バランスをとることが出来るというわけである。

ウクライナ革命、クリミア併合、ウクライナから独立を宣言した、東部新ロシア派について、マレーシア機撃墜について等々「米英情報ピラミッド」と「クレムリン情報ピラミッド」の情報が詳しく記されていて、ここまで異なるのか「これぞまさしく情報戦！」と驚く。



NHK は、中国の国営放送である中国中央電子台（CCTV）の日本支社と、韓国放送公社（KBS）の日本事務所を同居させている。国民が支払ったお金は中国と朝鮮の放送局のためにも使われている。こちらは、「米英情報ピラミッド」の中に、「中共情報ピラミッド」が同居している。

戦争になれば真っ先に制圧される放送局に日本の領土を虎視眈々と狙っている中国の放送局を入居させるというのはどういった理由なのか不明である。

NHK の北京支局は中国中央電子台に入居し、NHK ソウル支局は韓国 KBS 内にある。こちらは、「中共情報ピラミッド」の中に、「米英情報ピラミッド」が同居しており、米英の情報は筒抜けであるが、中共の情報はあまり漏れないようである。しかし、こちらのNHKは戦争になれば即人質である

日本人は普通「米英」情報ピラミッド内にあつてそれに洗脳されている。自分で洗脳から抜け出す方法は？ そのために、まず「洗脳」を成功させるには二つの条件があることを知っておこう。

1つ目の条件は、同じ情報を繰り返し繰り返し与え続けること。

中国や韓国では、子供のころから、「日本は極悪国家。日本人は極悪民族！」と1億回繰

り返し洗脳する。北朝鮮では、その上に、「金正恩は神のごとき人」と洗脳する。

2つ目の条件は、「他の情報を遮断する」こと。「独裁者＝神のごとき人」と信じさせることに成功したのはソ連のスターリン、中国の毛沢東、北朝鮮の金日成だった。これらの国では、当時は外国の情報に接したり、外国に出ることが極めて難しかった。

「クレムリン情報ピラミッド」は「クレムリンの洗脳マシン」、「中共」情報ピラミッドは「中国共産党の洗脳マシン」であることを決して忘れないことだ。

彼らは、英米や欧州のダークサイドについては、遠慮なく報道する。例えば、ロシアの国営テレビ「1 (ペルヴィー) カナル」では、「9・11は、アメリカ政府の自作自演である！」といった。あるいは、中国では、「マレーシア機撃墜は、プーチン暗殺未遂だ！」と。。。。

日本にいながら、「クレムリン」情報ピラミッド、「中共」情報ピラミッドにアクセスするには、どうすれば良いか。

「中共」情報ピラミッドには、「人民日報日本語版」(<http://j.people.com.cn/>)。「クレムリン」情報ピラミッドには、ロシア国営ラジオ「ロシアの声」HP がお勧めだ。
(<http://japanese.ruvr.ru/>)。

その他、著者の北野流の情報収集術が書かれているが、一つは人。すなわち、「情報筋」である。もう一つは、メディアで、これらについても詳しい記述がある。

さて、実際の「殺戮戦」だけでなく、「情報戦」、「経済戦」も「戦争」として捉えなければならぬ。これは、「平和ボケ」の日本人が、絶対に知っておくべき大切な原理だと著者は言う。日本人は、「戦争」とは「実際に武器を使って殺し合うだけ」と考えているが、そうではない。武器を使って殺し合う前にも、その最中にも、「情報戦」という別の「戦争」が行われる。

情報戦争①は、国民を洗脳することである。世界中のどの国でも、戦争を始めるかなり前から「敵は悪魔のような国である」、「放置しておけば、必ずわが国は酷い目にあう」と大々的にプロパガンダして、国民を信じさせなければならない。すなわち、国民があたかも「自ら望んで戦争する」ように、スマートに誘導していかなければならない。要するに、まず国民を「プロパガンダ」によって「洗脳しておく」必要がある。

情報戦争②は、国際社会を「洗脳」することである。つまり、「情報戦」というのは、「情報戦争」と強く認識しなければならない。少なくとも「日本以外の国々」は「そういう意識でいる」という。戦争だから、「客観報道」とか、「事実だけを報道する」とかいつてられない。はっきり言えば「ウソを 100 万回いつて、国民と国際社会を信じさせるべし」という明確な意図を持っていつている。

なぜ、中国や朝鮮は、日本に関する大ウソを、堂々と世界に流布することが出来るのだろうか？

そのことで、私たち日本人はとても傷いつている。ところが、中韓は「俺たちは戦争し

ている」という「明確なメッセージを日本に送っている」ということを日本人は知らなければならぬ。

めでたく「情報戦」で優位に立ったら、次は、「経済戦」が始まる。経済戦とは経済制裁のことである。こうやって、実際の戦争が始まる前に、敵国の経済基盤を破壊し、戦争遂行能力を弱めておく必要がある。経済が破壊されれば、金が無くなり、武器が買えなくなり、軍隊が弱くなる。……………。

本書全般を通じて、日本以外の世界各国は「善か悪か」に関係なく、「どうすれば勝てるか」のみを考えていることが良く判る。

現在の日本の仮想敵国は何と言っても中国である。中国の侵略を防ぐためにも、アメリカ、EU、ロシア、インドと良好な関係を構築しながら、この小さな地球で領土を争い暴れまわる国家を見極める「大局観」をもって事にあたり、そしてやっぱり日本も自立しようというのが著者の口癖である。



かつて、黄文雄氏の「日本人が絶対に理解できない中国人と韓国人」（徳間書店）という本を読んだことがある。なるほど、「隣国の実態、思考法と癖などを知ることは大変なことだなあ」と感心したものである。しかし、本書の著者（北野氏）は、「中韓と日本は今現在戦争状態にある」という。もし、正しい国家観を持たない政治家が外交の場に立ったら、相手国の利益ばかりを受け入れることに繋がり、日本は確実に衰退したであろう。

民主党が政権の座にあった3年3ヵ月の間に、我が国の内政も外交もぼろぼろにされた。その正視出来ないほどの失政の連続と、それを姑息な嘘で誤魔化せると信じ込んでいた姿勢は許し難い。とは言うものの、彼らが無能ゆえの無為無策によって、日本は何とか持ちこたえることができた。

民主党は身をもって「無能な政治」の貴重な実例を示し、日本国民に学習の機会を与えてくれた。

中韓とは現在「情報戦」の最中だが、中韓の人々は「俺たちは戦争しているのだぞ」という、明確な意思を持っていることを認識する必要がある。

中国や韓国の壮大無比の誇大妄想に取りつかれた捏造報道は、日本人にはとうてい理解不能である。中国や韓国は世界を必要としているが、世界は必ずしも中国や韓国を必要としていない。中韓は、世界の不穏の根源でもある。

中国は、1950年のチベット侵攻から現在までに、虫も殺さぬチベット人を、120万人以上を殺したと言われている。チベットの例を見れば、「平和憲法があれば、戦争は起こらない」などというのは「完全な幻想」であることが判る。

世界に誇れる自立国家日本を作るために、著者の「日本人の覚醒」のための秘策に学び、私たち自身が大局観を持って、国益を達成するためにはどう考え、何をなすべきかを知ろう。著者は「日本の自立は私の自立」だという。

2015. 2. 22